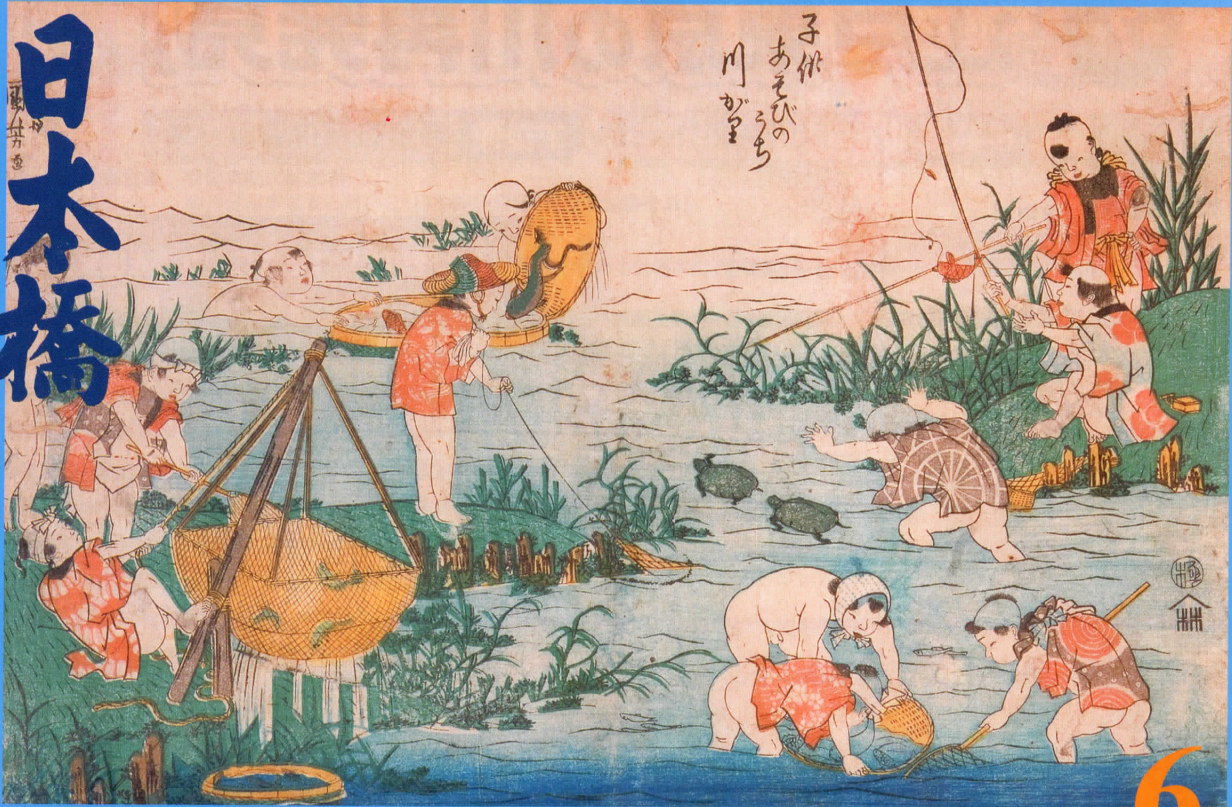


日本橋



特集 大根河岸

手頃で、量もあり、なにより美味しい！ と江戸時代から庶民に大人気だった大根。たくあん漬に重宝された練馬大根、春先に好んで食べられた亀戸大根……大根河岸にはその名のごとく、一年中たくさんの大根が入荷されていた。

寛文年間に始まった大根河岸。記念碑建設50周年を迎える今、その歴史に迫る！



昭和5、6年頃銀座一丁目付近より写した紺屋橋付近の大根河岸青物市場の風景



中央区京橋3丁目の首都高速道路脇にある「京橋大根河岸青物市場跡」の碑

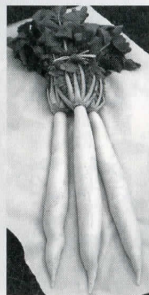
～大根河岸と記念碑の歴史～

寛文年間（1661～1673）の初期、外濠の数寄屋橋付近にできていた市場が、火災にあい、京橋川の北西岸・紺屋町に移転した（現在、碑がある場所）。この市場には大根の入荷がとくに多く、誰言うとなく「大根河岸」と呼ばれるようになり、江戸時代中期には、神田多町・駒込・千住・本所の市場と並んで「五大やっちゃば」に数えられるほど賑わった。

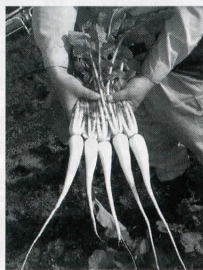
移転から200年余を経過した明治10年には、問屋が37軒、仲買が17名を数えるまでになり、東京府の認可を得て組合を設立し、大市場としての基礎ができた。

大正12年9月の関東大震災では大被害を被ったが、関係者が復興に努力し、以前にも増して盛況となる。しかし、昭和10年の中央卸売市場法の実地にともない、築地中央卸売市場に移転。

昭和30年代に入ると、首都圏整備計画で外濠の埋め立てが始まった。外濠と東京湾を結んでいた京橋川も昭和35年に埋め立てられ、昭和37年12月に日本で初めての高速度道路に生まれ変わった。かつて大根河岸で生業を立てていた問屋・仲買などの有志は、京橋川埋立ての工事が始まる昭和34年6月、京橋のたもとに「京橋大根河岸青物市場跡」の記念碑を建て、長き歴史を偲んだ。しかし、現在も大根河岸の歴史は東京中央青果株式会社によって受け継がれ、今年6月13日には記念碑建設50周年を祝うイベントも開催される。



たくあん用の名品・練馬大根



早春に収穫される亀戸大根

京橋大根河岸記念碑建設50年を祝う会

開催日……6月13日(土) 15時～(雨天決行)

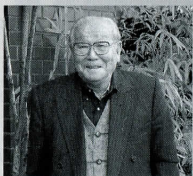
場所……大根河岸記念碑前(中央区京橋3-4)

主催……大根河岸会(代表・石川勲)

神事……日枝神社 築地市場の繁栄と物故者の慰霊

奉納として東京農業大学応援団による〈大根踊り〉と桜川ピン助社中による〈かつぼれ〉が行われ、野菜・果物の無料配布(先着順)もあるので、是非足を運んで見ては。

大正11年(1922)京橋生まれ。
大根河岸の問屋で育った小松正夫
さんが語る——



大根河岸の思い出 小松正夫

老舗の並んだ大根河岸

この辺りは、私が生まれた関東大震災前はまだ土蔵のある家が立ち並び、今の川越(埼玉県)のような町並みでした。昭和10年に築地に移転するまで、青果市場の大根河岸がありました。

大根河岸には江戸時代より続いている有名な老舗が多数ありました。青果市場を始め地域の発展や各界に尽力なされた、有名な故藤浦富太郎氏のご生家「三周屋」を始め三長、三光山、三喜代さんなど、三の字を頭につける屋号の店舗も多く、また遠広、遠重さんなどの遠小田源、小田東、小田重さんなどの小田原出身という関係からの屋号、そのほかにも有名な老舗がありました。最盛期には問屋58軒、仲買人105名の大市場でした。大根河岸記念碑には、建立さ

れた各店舗の屋号が永久に刻まれている。その懐かしい市場がしのばれます。

生家「小松屋」

私の生家「小松屋」は、江戸時代より日本橋室町で武家屋敷から注文を受けた種々の物品を一括して納入する献参業を営んでいました。京橋に開いた分店が私の先祖に当たります。そして、明治維新によって献参業ができなくなりましたので、芋問屋を開業いたしました。日清戦争の頃からは乾物・雑穀などの食料品を販売し、次第に食品全般の卸小売の店となつてゆきました。

扱っていた商品の中で、一番高価な缶詰類は味の素の金色缶、一番大きな缶詰は直径20センチ位の「黒アンズ」でした。「カンピョウ」は細長い俵から取り出して、口に含んだ水をプツと吹っかけ、それを表で完全に乾かしてから販売していました。椎茸は薄いブリキ板の箱に密封されており、空になったその箱は衣類入れに重宝しました。小豆・大豆類は、一升、五合、一合マスでの量り売りで、丸い棒でマスの上をなでてから紙袋に移し、お客

乾物雑穀問屋

小松忠五郎

東京市京橋区大根川
電話京橋(二千百八拾四番)
電話京橋(二千百八拾五番)

小松さんの実家の名詞。「大根川岸」とあるが、このように表記されることもあったそう

様に渡しました。白ゴマや黒ゴマの場合
はマスに入れてから手でたたくと大分減
るので、おまけすることが慣習でした。

江戸の香りの残る、河岸の生活

夜明け前より賑やかなる河岸の生
活には、江戸時代の風習がまだ残ってい
たと思います。各家の間にある約二間半
の路地に面してお勝手口と便所が作ら
れていました。昼間も暗いこの路が日常
生活の出入口でした。二階には必ず物干
し場があり、夏にはここで扇子や団扇を
使いながら、隣どうしがビールなどを飲
みながら、雑談にふけりました。また、し
もた屋と呼ばれる商売をしていない住
宅のみの家も散在していました。

金魚屋さん、お花屋さんは夏の知ら
せ。また洗濯もののよく乾くこの季節
には、「竹や、さお竹」の売り声も聞えて
きました。タンスの引き出しにつけられ
た金具を「カタカタカタ」と鳴らす富山
の薬屋さん、「ピーピーピー」と独特な
音をたてながら車を引っ張って来るら
お屋さん（キセルを掃除してくれる）と
いった行商の人もいました。

大根河岸の一年で一番忙しかったのは
大晦日。前夜遅く、また早朝より正月
用の新鮮な青物、果物などが非常にた
くさん入荷しました。大声でのセリが
開始され、午後になってからも来店す
る人は多く、夕刻を迎えて暗くなる頃
からは、集金、支払い、帳面の整理など。

そして大掃除を終らせ、除夜の鐘を聞
きながら元旦を迎えます。「大晦日の晩
に寝るやつはバカだ」とはしゃいでいた
子供たちも、結局は眠ってしまいます。

清々しいお正月は、お昼頃より起き
てお雑煮をいただき新年を祝います。き
れいに掃かれた表通りに国旗と門松の
並ぶ街並は、日本らしい正月の景色です。
元日は各家庭でゆつくり休み、翌日2日
には初荷が開かれます。新年を祝う幟や
旗が入荷のための舟・貨物自動車など
につけれ、勇ましいセリが始まります。青
果物を買いに来る八百屋さんの荷車に
も小さな旗がつけられ、初荷の雰囲気
を盛り上げていました。また各店舗に用意
されていた祝い酒に酔ってほろ酔い気分
で帰ってゆく方も多く、あるいは銀ブラ



大根河岸の神輿。実に立派で、震災で焼けてしまったのが残念だ

を楽しむ人もかなりいたと思います。3日より平常通りの営業に戻りますが、通常では5日に新年宴会として町内・同業者・各商店の家族などで新年を祝する夕食会が開かれます。大根河岸は暮れが忙しく、子供たちはクリスマスにおもちゃとお菓子は買ってもらえますが、家族でゆつくりと食事をするのはできませんでしたから、新年宴会の日を一番楽しみにしておりました。そして、7日に七草粥をいただき、楽しい新年の行事は締めくくられたのです。

お祭り模様

大根河岸のお神輿は、日露戦役の戦勝記念として、神田の宮惣で純金箔を貼らせ、当時の金額で30000円。今なら1億円出しても作れないと言われていきます。残念ながら関東大震災で焼けてしまったので私の記憶にはありませんが、聞いたところによると山王日枝神社の中では一番、また日本でも指折りのもので、百貫神輿とも呼ばれ、担ぎ手は100人程も必要だったとか。銀座通り、鍛冶橋通りより宮城目掛けて練り歩く様はそれはそれは壮大だったそうです。

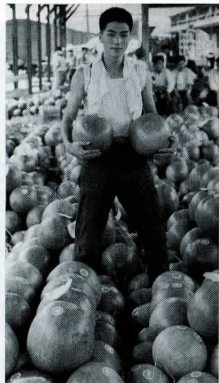
お祭りの時、お神酒所に女将さんが詰めて接待しますが、青果問屋さんの女将さんは美人揃いで、その娘もまた美人。中でも現在、大根河岸会会長をされている石川勲さんのお母様は、クラブ化粧品のモデルにも起用されるほど

の美人で、まさに大根河岸小町。私も子供心にも「きれいな人だなあ」と憧れていました。男衆は男衆で、神輿を作るといえばボンと金を寄付するし、神輿を担ぐのが大好きな威勢のいいのがいっぱいいる。女性は美人で、男は氣つ風がいいとくるんですから、大根河岸のお祭りは最高だったと言われています。

築地への移転

泰明小学校へ通う道すがら毎日見ていた、銀座二丁目の荷揚げ場の石の階段に置かれた大根がたくさんの水をかけられ朝日に輝く光景は、大変に美しいものでした。なんといつても日本橋際の魚河岸と共に、江戸発展の礎となった大根河岸です。

しかし昭和10年に築地卸売市場が完成し、この青物市場も少しずつ移動を終え、紀元節にあたる2月21日の佳き日に開場の運びとなりました。その前日には、幟を先頭に市場関係の旦那衆は全員紋付袴またはモーニング姿の正装で、店員の方々、仲買人・附属商の方々もこれに続き約300人の行列が京橋から銀座通りを経て、築地に向かいました。私は、その厳粛な行列が見えなくなるまで見送りました。毎日のように眺め、時には心の励みとした故郷でもある市場が、もう築地にいつてしまったなあと一抹の寂しさがこみあげてきたことを今も思い出します。



築地の青果市場

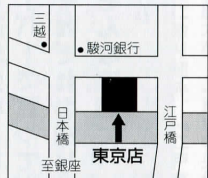
まるで日活のニューフェイスもような、若き日の石川勲さん。築地の東京中央青果に勤め始めて間もなくの頃。小松さんによると「ご両親ともに美形だったから、石川さんご自身もう相当に男前」とのこと※「人物誌」(P40~41)に石川さんのインタビューを掲載。合わせてご覧ください



石川やすさんは、石川勲(大根河岸会会長)さんの母上。大根河岸小町と評判も高く、クラブ化粧品にスカウトされ、日本髪モデルとして各地でのキャンペーンにも参加したそう。この写真も宣伝用のプロマイド

 信吉屋

東京店
中央区日本橋室町一丁目 8-8
電話 (03) 3243-0551 (代)



日本橋三越より3分 江戸橋手前右側

販売期間

六月二十九日(月)・三十日(火)

一個 税込二二〇円



■ 水無月みなづき

和菓子歳時記

六月三十日。京都では半年の穢れを祓い、夏の息災を祈る伝統の行事「夏越の祓」にちなんで、氷室形の外良に小豆をのせた「水無月」というお菓子を食べる習わしがあります。むかし宮中で氷室の節会といって氷室の氷を群臣に賜り、その氷片を口にすれば、病気にならないとされたことに由来します。